

人間とは？ —— 「ホモ・サピエンス」、  
それとも「ホモ・ファーベル」か？ ——  
What is human nature ?  
—— “Homo sapiens” or “Homo faber” ? ——

圓 増 治 之  
Haruyuki Enzō

(I) はじめに

20世紀最大の文化史家の一人であるホイジンガは、人間とは「遊ぶ存在」、すなわち「ホモ・ルーデンス」であるとして、それまでのヨーロッパの伝統的人間観とは異なった新しい人間観を私たちに提示した。しかし古来数ある人間の定義のうちでも最も古く、かつ今日でもなお代表的なのは、なんといってもやはり、人間を「ホモ・サピエンス」（英知人）と呼ぶ場合のそれであるだろう。人間の本質を知性、とくに理性の働きのうちにみるこの見方は、古く古代ギリシアにまで遡ることができる。しかし、ホイジンガによれば、近世、「われわれ人間は、理性を信奉していたある世紀がとかく思いがちだったほど理性的であるとは、とうてい言えないことが明らかになったとき、われわれの種族である人類の名称として「ホモ・サピエンス」と並べて、作る人すなわち「ホモ・ファーベル」という呼び名が持ち出された<sup>(1)</sup>のであるという。「ホモ・ファーベル」という呼び名が持ち出された理由が、ホイジンガの言う通りであったかどうかは別にして、とにかく今日では人間を特徴づける言葉として「ホモ・ファーベル」（工作人）は「ホモ・サピエンス」と並んで最も一般的に通用している。

そこで私たちが今ここで「ホモ・サピエンス」と「ホモ・ファーベル」とをキー・ワードとして「人間とは？」という問いを少しでも解き明かしていきたいと思う。

(II) 「ホモ・サピエンス」としての人間

生物学上の用語としての「ホモ・サピエンス」は、私たち人類の祖先である「ホモ・エレクトス」（「直立人」の意）から区別して、現代人を含む後期旧石器時代以降の人類を指す語として使われている。しかしその一方でまた、「ホモ・サピエンス」という語は、哲学的問いとしての「人間とはなんであるか」という問いに対する或る特定の見解から人間を呼び表わす語としても用いられている。すなわち、その見解とは、思考するという理性の働きを人間に固有の働きとして、そこから、「有るがままの」（自然の）人間についてというよりむしろ、（本来的に）「有るべき」人間について、哲学的・倫理的に考え求めていることとする立場である。私たちが今ここで採りあげようとしているのは、むしろ後者の立場で用いられるような意味での「ホモ・サピエンス」である。

「哲学」（フィロソフィア）という活動を生み出した民族である古代ギリシア人は、哲学的見解だけに限らず広く一般的に人間を「ロゴスを持った動物」として見ていた。ただギリシア語の「ロゴス」という語の意味するところは、「言葉」、「理性」などと広く、それに応じて「ロゴスを持った動物」という言葉も、「話しをする動物」、「思惟する動物」など様々な解釈することができたのである。古代ギリシア哲学を集大成したアリストテレスの残した人間の定義として「人間は生まれながらにして political animal である<sup>(2)</sup>」という言葉が有名であるが、その理由について、アリスト

テレスはその著『政治学』のなかでこう語っている。すなわち、「何故に人間はすべての蜜蜂やすべての群居動物より一層ポリス的であるかということも明らかである。何故なら自然は、われわれが主張するように、何ものをも徒らに作りはしないのに、動物のうちで言葉（ロゴス）をもっているのはただ人間だけだからである」、と。つまり、「ポリティカル・アニマル」というアリストテレスの定義も、実は「ロゴスを持った動物」という古代ギリシアの伝統的定義をうけて、その延長線上で語られたのであった。

さてところで、よく知られているところであるが、アリストテレスは私たち人間の行為について、それを「キーネーシス」と彼が呼ぶところの行為と「エネルゲイア」と呼ぶところのそれとに區別して、考えている。

「キーネーシス」とアリストテレスが呼ぶ行為は、その行為の目的がその行為そのものではなく、その行為の外に置かれているそのような行為である。アリストテレスがその著『形而上学』のなかで例として挙げているのは、「贅肉を取る」こと、「学ぶ」こと、「歩く」こと、「家を建てる」こと、などである<sup>(3)</sup>。私たちはこれらの行為をその行為それ自体のために行うのではなく、それとは別の他の何かのために行うのである。例えば、「贅肉を取る」ことはそのこと自体に目的があるのではなく、「美しく見せる」ためであったり、あるいは「健康になる」ためであったり、さらにまた、「敏捷に動く」ためであったりするであろう。このような行為はやがて或る時に——すなわちその目的に到達した時点で——終止するはずの行為である。しかしその目的を達成するまでは、その行為は未完了である。そして目的を達成した時は、すでにその行為を完了してしまっている。贅肉を取りつつあるときにはひとは贅肉を取り終わっていない、そして「美しく見える」ようになった時、もはやそれ以上贅肉を取る必要はなく、すでに贅肉を取り終わってしまっているのである。

これに対して、「生きる」、「見る」、「思惟する」など「エネルゲイア」と呼ばれる行為に於いては、その行為それ自体がその行為の目的である。それはその時々「今、現在」の瞬間に於いて完結している行為である。アリストテレスによ

れば、「例えば、ひとは見ていると同時に見てしまっているし、思惟しつつあると同時に思惟してしまっている」のである。そもそも、「生きる」という活動の目的が「生きる」ことの外に、すなわち「死」のうちに、あろうはずはない。「生きる」こと自体のうちに生きる目的は内在するはずである。「生きている」各瞬間に於いてその目的を達しているはずである。「ひとは生きているとともに生きてしまっている」のである。本来「生きる」ということは「時間のうちで」行われるキーネーシス的運動のように考えられてはならないのである。「生きる」とは果して「時間のうちで」誕生からその死にいたるまでを単に経過していくことにすぎないでしょうか。いやそうではないだろう。本来的な生は時間のうちで生きるというよりむしろその生ける律動の方こそ時を刻み、刻々に時を生み、刻々の時を生きていくのではないだろうか。このように刻々の今現在を生きるとともに生きてしまっているという生き方での生こそ、本来の生々とした生ではないだろうか。そして、このように生きられる「今」こそ、他の「時」、他の「今」によって置き換えることのできない掛け替えのない「今」なのである。そしてまた、掛け替えのない「今」を生きる「生」も、他の何ものによっても置き換え、測ることのできないものなのである。

翻って言うならば、このような意味で単なるフィジカルな（物的・肉体的）運動（キーネーシス）から區別された「見る」、「思惟する」といった活動は、「生きる」という活動の単に一つであるばかりではなく、「生きる」ことの本性に最も即した生き方、つまり最も生々とした生き方であるといえるであろう。それ故にであろう、アリストテレスは人間の生活を、「享樂的生活」、「政治的生活」、「観想的生活」の三つの形態に大別し、「観想的生活」こそが、人間にとって最も優れた、最も快い生活であるだろう、と述べている<sup>(4)</sup>。この「観想的生活」は、ピュタゴラスに帰されるオリュンピア競技場に集まる三つのタイプの人間（商人、競技者、観客）の比喻に於ける「観客」に相当する。「商人」はものを売るために、競技者は競技に勝つために、そこにやってくる。しかしそれらはそれぞれそれ自体究極の目的ではなく、そ

れらはさらに別の目的のため、例えば「金銭」のため、「名誉」のために求められるのであり、その目的もまたさらに別の目的のために求められるのである。これに対し、「観る」ために集まった人は、ただ「観る」ことそれ自体が目的である。つまり彼らはただ純粋に観るために観ているのである。今現に観ていることに於いてその観るという活動はその目的を達成している。その「観」ている現場に於いて「観ると同時に観てしまっている」のである。観るという活動は、そのいかなる時点に於いてもそれぞれ完結しているのである。<sup>(5)</sup>

ところで今日の私たちは、ともすればアリストテレスが「エネルゲイア」と呼んだ活動に帰すべき活動をも、「時間のうち」で行われるキーネシス的な運動のように、表象しがちである。人間の生き方・行為のすべてがそのように表象されることによって、時間・空間の外延的な拡がりのなかで、量的に、すなわち厳密に測定することが可能となり、「数学」によって表わすことができ、従って「計算」可能なものになってしまうのである。私たちの生き方がそのようになるに伴って、今日では私たちは本当に自分自身で「思惟する」ことが全くとまてはいわないとしても、ほとんどなくなってしまっている。今日学校で生徒になによりもまず求められるのは、自分で「思惟する」ということより、他人から「学ぶ」ということであり、「記憶する」ということである。そして「考える」といわれる場合も、それは「思惟する」ことのように見えて、その実「計算する」ことである場合が多い。「考える」ことは量的に測って評価することはできないのに対し、「記憶する」、「計算する」といった働きは、どれほど記憶したか、どれほど速く正確に計算できるかと、量的に測ることができる。そして今日の私たちは量的に、数字でもって表わすことのできるものしか信じようとしないのである。そうした見方が、今日「科学的」見方、評価ということになっているのである。

今日私たちは「科学的見方」ということでもって、すべてのものを知らず知らずのうちに、時間・空間の均質的（ホモジーニアス）な拡がりのうちに置いて、時間的・空間的に「いつからいつまで」、「どこからどこまで」と量的に計れるものとして

専ら見ようとしている。そして、そのような見方に於いては、量的に計ることのできないもの、数字に還元することのできないものは、その視野の外に置き去り、無視してしまうのである。このような見方は、さらにそのような見方をしている私たち自身にもはね返ってきて、私たちの行為や営為もやはり暗黙のうちに、量的に測られ、計算されるものとして見られる。このように私たちの営みが量的に見られるようになった結果として、私たちの営みは「より多く」、「より速く」とその量的拡大が求められることになり、ここに今日大量生産（マス・プロダクション）、大量情報伝達（マス・コミュニケーション）の社会、すなわち大衆社会（マス・ソサイエティ）が出現したのである。

今日私たちはこの量化の、いや大量化の社会にあって、そこで「生きる」というよりはむしろ、大量におし寄せてくる商品に、情報におし「流されている」といえないだろうか。そして、時代の、流行の流れに忙がしく駆り立てられて日々を過していくことによって私たちは、その背後にアリストテレスが「エネルゲイア」と呼んだ意味での「生きる」という活動を、「思惟する」という活動を置き忘れてしまっているのではないだろうか。

### (III) 「ホモ・ファーベル」としての人間

アリストテレスは、社会的・政治的行為のためでも、物質的製作のためでもなく、それらから遊離したただ知のための知、ただ自分自身を思惟する「思惟の思惟」という活動を人間の生活の最高の目標としたが、アリストテレスのこの見解に対し近年以降しばしばその見解がその当時の奴隷制に基づく発想であるとの非難が投げかけられてきた。例えば、B. フェリントンが『ギリシア人の科学』のなかで比較的素朴な反映論でもって次のようにアリストテレスを批判している。すなわち、

「こうして、このアリストテレスの見解のもとで教育された政治家がこの自然を助けて自然の意図を実現させたとすれば、或いはその社会が主人階級と奴隷階級との二つだけに分けられたとすれば、そのときにはこの有閑階級は全き自由をえて

理性の最も高貴な働きに、すなわち例えば形而上学、第一哲学、神学の研究に専念しうるであろう。そして、奴隷階級の存在のおかげで、その主人たちは、物質的な事物をではなしに思想を思惟し、思惟を思惟して、あの「できるだけ不死であるように」との訓戒を果すことができるであろう。ここに、<sup>(6)</sup>「靈魂の不死そのことまでもが一つの階級の特権とされている」、と。

唯物論的立場以外、例えばプラグマティズムなどからも、古代ギリシア以来の伝統的人間観に対する同様の批判があるが、それらの批判の背景には「ホモ・サピエンス」に代わる「ホモ・フェーベル」という人間の呼び名で代表される新しい近代的な人間観が存している。

近代になると、人間は科学のめざましい発達のなかで、それに伴って進歩していった道具・器具さらには機械を用いて積極的に自然に働きかけ、自然を支配し、改変して、人間のために自然を利用しようとするようになった。古代や中世の、そして東洋の括弧つきの科学とは異なり、近代ヨーロッパの科学は、その特徴として先に触れた「計測」と、それに「実験」、この二つに基盤を置いている。近代科学に於いて、人間は自然をその外から単に静観的に観察し、そしてそれをもとに自然について頭のなかだけで思弁的に考えるのではなく、もっと能動的に自然にかかわっていく。すなわち、「実験」を通じて自然のうちにその手をさし挿み、そこから自然についての知識を文字通り掴み取るのである。近代の自然科学は、カントによれば、「一方の手に理性の諸原理を」、「他方の手にその原理に従って考案された実験を」、持って「自然に立ち向う」こと<sup>(7)</sup>によって着実な歩みへともたらされたという。近代技術は科学的理論の応用として自然科学の発達に基づいて進歩してきたが、逆にまた、近代物理学の方も実験物理学として計測装置・実験装置や、従ってまたその装置製作の技術的進歩に基づいて発達してきた。近代科学の発達の裏面には、理性の「思考する」(Denken) という働きとともに、その思考を外界(自然)のうちへ投影し、道具を、実験装置を工夫して文字通り「考え出し」(Ausdenken)、作り出す手の働きを見い出すことができるだろう。

いや、人間の本質を道具を作り道具を使用する

活動のうちにみる立場から、振り返ってみるならば、近代科学のみならず、さらにそもそも人類の科学の先史は、すでに生物学的意味での「ホモ・サピエンス」以前の「ホモ・エレクトス」(「直立人」)の時代の「手」の成立とともに始まるとみられる。太古熱帯のジャングルで樹上で木の枝を掴んで枝から枝へ移動しながら生活していた人間の祖先が、亜熱帯のサヴァンナへ降り立ち、直立歩行するようになると、二本の前肢が空き、自由になった。そしてその空いた手で物を自由に掴み、その物を道具として意のままに使い、さらにそれを駆使して別の道具を次々と作っていきことができるようになっていった。以来人間は手と道具の発達と平行に理性を発展させていった。すなわち、手を使い道具を作り、手で道具を使うことによって人間は「思考」し、逆にまた「思考」することによって新たな道具を考え出し、作り出していった。とこのように「人間は道具を使う動物」とする立場からはみられるのである。

上のような見方をさらに敷衍すれば、理性もまた実在的な道具を考え出すための「観念的な道具」とみること<sup>(8)</sup>もできるであろう。カントは『実用的見地における人間学』のなかで次のように言っている。「理性的動物としての人間の特性は、すでにその手、その指さきの形態と組織に存している。自然は、それらのものの、一部は構造、一部は繊細な感じを利用して、人間を、物を扱う一つの仕方に対してでなく、これときまつたものでなくあらゆる仕方に対して、したがって理性を扱うこと<sup>(8)</sup>に対しても、巧みなようにしたのである」、と。

とはいうものの、ただしカントの場合、理性を道具的に巧みに扱うのも、これまた理性自身、しかも「工作人」(homo faber)としてのではなく、いうなれば「道徳人」(homo moralis)としての人間の理性自身なのであるが。すなわち、人間の理性は道徳的「実践」に於いて自らによって自分自身を自分自身へと高めていくと、カントは考えているのであるが。なるほど実際もし理性がカントが考えたような「実践理性的」な自律を自ら手放してしまえば、理性は他の何かの単なる道具に自ら成り下ってしまうであろう。そしてこのことは紛れもなく、テクノロジーの時代を生きる私たちが陥りかねない危険である。

ところで、「ホモ・ファーベル」としての人間が自然に教えを乞い求め、そこから自然法則を学ばんとするのは、自然を利用し、自然を征服し、自分の欲求を巧みに満足させんがためであった。そのために、人間は自然から学んだ知識を利用し、道具を作り、利用し、自然を加工し、支配しようとするのである。言い換えれば、人間は自然の必然的法則を学び、それに従うことによって、かえって逆に自然を人間の意志に従わせようとしているのである。このように「ホモ・ファーベル」としての人間は道具を使用して自然を支配し、さらに自然を道具として利用して狡猾に自分の欲求を満足させようとするともいえる。

この場合、手工業の段階であるなら人間は道具を自分の手でしっかり握って巧みに使用することに於いて、人間は自分が道具を使用する主体・主人であることを、自然を加工する主体・主人であることを、確かな手ざわりでもってしっかり実感することができたであろう。しかし、人間の手の巧みに依存した手工業の段階から、独立的な自動的道具としての機械工業の段階へと進む近代技術の歩みのなかで、人間はその実感をなお手にすることができたであろうか。いや、産業革命がまだその端緒についていなかった1800年代初めのドイツに於いてすでに「ホモ・ファーベル」としての人間の行末を予言的に先取りしてヘーゲルは次のように述べている。すなわち、

「かかるものとして道具は人間の物質的破壊から人間を防ぐ。しかしそのことのうちに人間の活動がある……。機械に於いて人間は自分のこの形式的な活動を自分で止揚し、機械をして全く人間のために働かせる。しかし、人間が自然に対してかけたあの欺瞞は、……人間自身に対して仕返しをする。人間は自然から何をかちとろうとも、人間が自然を征服すればするほど、人間は自分自身卑賤になってしまう。様々の機械によって人間が自然を加工せしめることによって、人間は自分の労働の必然性を止揚するのではなく、自分の労働を引き延ばすにすぎず、労働を自然から疎遠なものとして引き離してしまうのである。そして自然に対し生ける自然として生々と向うことがない。この否定的な生々とした生気が失せてしまって、人間に残された労働は自分自身一層機械的となっ

てしまう」、と。<sup>(9)</sup>

機械の使用は、本来なら人間の労苦を軽減し、それから人間を解放するはずであった。しかし、たとえそれは人間の労働を軽くすることはあったとしても、労働そのものを揚棄してしまうことは決してない。いや、19世紀産業革命に於ける機械の使用によって、労働は軽減されるどころか、かえって苛酷なものとして人間に重くのしかかってくるようになった。すなわち、機械の使用によって手工業に必要であった熟練が不用となり、熟練の質的差異が捨象され、人間の労働が単純労働へと抽象化され、その結果、労働が量的に計られるようになり、労働が量的に延長されることに、すなわち労働時間が延長されることになった。そしてやがてベルト・コンヴェア・システムによる流れ作業の「永劫回帰」的な繰返しとして、非人格的・機械的なものになっていったのである。

近代人間の労働が生気を失い蒼ざめて機械的になればなるほど、それに反比例して機械の方がますます生気を帯びてくるようにみえるかもしれない。現代人は高速道路網を走り廻る自動車に、あるいは、地球上の隅々から電波を通じて私たちの居間に飛び込んでくる映像に、むしろ生命の息吹きを熱く感じるかもしれない。そして、一つのモノとしての機械以上に機械技術、テクノロジーは今日、人間も自然もその支配下に拉致して忙しく駆り立て増々加速度を増して発展している。このテクノロジーの時代にあって、加速度的に進歩するテクノロジーの歩みについていけない老人は、時代にとり残されて、みじめな存在と自分自身でも若い人からも感じられるかもしれない。今日ほど老人のもつ老巧さが顧みられなくなった時代はないであろう。それではテクノロジーの進歩に乗ることができる若者はどうだろうか。その忙しく動き廻る生活は一見生き活きとした生活であるかのようにみえるかもしれない。しかし彼らとて単にテクノロジーの進歩に単に息つく暇もなく駆り立てられているにすぎない。やがて息が詰まる思いをするにちがいない。

#### (IV) 人間の第二の自然（本性）

このようにして、人間の生活を豊かにするため

の道具であったはずの機械やテクノロジーに今日逆に人間は隷属し、それに振り回されて生活する事態が現出してきている。しかしいかに私たちの生活が機械的になろうとも、機械そのものには決してなることはない。コンピューターに管理された社会に息苦しさを感ぜ、息の詰まる思いをするのも、まさに私たちが機械ではなく生ける生命であることの証しに他ならない。そこで人は窒息しそうな管理社会を離れて一息つくために「遊び」に出かける。しかしそれはあくまで「充電」のための「遊び」でしかない。やがて再び元の「元気」を取り戻して、再び「仕事」に戻っていかねばならないのである。

このような「遊び」はパスカルが「ディヴェルティスマン」（気散じ、気晴し）とよんだ「遊び」に似ている。「レジャー時代」の今日とは異なり、17世紀パスカルの時代には「遊び」は一部の特権階級、有閑階級（いわゆる the leisured classes）の人しか許されていないものであった。いや、パスカルの慧眼をもって見れば、「ディヴェルティスマン」としての「遊び」は、仕事をする必要のない者にとって必要不可欠なものであった。なぜなら、パスカルによれば、「人間にとって、完全な休息のうちにあり、情念もなく、仕事もなく、気晴しもなく、集中することもなしでいるほど堪えがたいことはない。すると、自己の虚無、孤独、不足、従属、無力、空虚が感じられてくる。たちまちにして、彼の魂の奥底から、倦怠、暗黒、悲哀、傷心、憤懣、絶望がわきでるだろう<sup>(10)</sup>」、から。パスカルからすれば、球を忙しく追いかけたり、兎を追いかけたり、賭事に熱中したり、観劇に出かけたりするのも、人間の根源の空しさから気をそらせるためなのであった。

今日そのような「レジャー」が大衆化し、管理社会の仕事から逃れた人々は、さらにまた自分自身の生の根源からも逃れようとして「遊び」に出かける。したがってその「遊び」は魂の奥底から発し魂を動かすような、『梁塵秘抄』で「我が身さへこそ動かるれ」と詠われたような生の根源的活動としての「遊び」ではない。それは、例えば「バック旅行」など、レジャー産業が用意してくれた「スケジュール」に乗って、単に暇を「消費」するだけの遊びでしかない。今日の消費生活で人

は、単にモノを消費するだけではなく、自分自身の時間を、従って自分自身の人生を空しく消費しているのである。それは人生を「生きる」というよりむしろ「消費」しているとでも言うべきであろうか。とにかく、今日ひとは「仕事」のみならず「遊び」に於いても、働いている時間も余暇の時間も、余すところなく大量生産・大量消費の産業社会のメカニズムに組み込まれ、それに隷属して独楽鼠のように動き廻って止まることがない。あたかも静止して顛倒することを恐れるが如くに。

かくして、人々は気ばらしを求め、新奇なものを求めて、観光地から観光地へと忙しく移動し、あるいは地球上のいたるところからマス＝メディアを介して大量に入ってくる情報を聞きかじり、聞きちらして、そこらじゅうに自分自身の時間と人生とを撒き散らしている。そして、自分自身の存在の上にとっかと自分自身の腰を落ちつけて座り、じっくり「考える」ということがなくなってしまっているのである。

産業社会のメカニズムの奴隷と化した現代人は自動車を乗り廻し遊び廻る「レジャー」はあっても、古代ギリシアの自由人のような、思惟に専念する「余裕（スコレー scholê）」はない。しかるに、アリストテレスによると、「幸福はスコレーのうちにあると考えられる、なぜなら、私たちが余裕なく働くのは、余裕をもって生きるためであり、戦争するのは、平和に生きるためだからである」、といわれる。この場合の「余裕」は、単に無為に過ごす閑暇でも、単なる「遊び」で過ごす閑暇でもない。一切の肉体労働から解放されて、思惟のために思惟することに専念できる閑暇である。このような思惟の活動こそ、政治的活動にも軍事的活動にも増してなによりも「真剣な」活動とされ、その活動のうちこそ生の充実があるとみなされたのであった。

ギリシア語の「スコレー」は、その第一義的意味の「閑暇」から、「閑暇な時にする仕事」という意味を派生し、さらに「このような仕事をする場所」、つまり「学校」という意味を派生し、英語の "school" をはじめ「学校」を意味する諸々の欧語がここから由来し生まれてきたのであった。ところが、今日の「学校」では、「じっくり考える」ことよりも、「より速く計算する」ことや「よ

り多く記憶する」ことが性急に求められている。それ故にであろう、学校のカリキュラムのなかで「ゆとりの時間」がことさら設定されなければならなくなってしまうのである。

ハイデッカーによると、「近代技術を貫き続べている露現は挑発する<sup>(13)</sup>という意味での立てるという性格をもっている」、という。すなわち、現代のテクノロジーは自然をその外に立って静的に静観するのではなく、「自然」の可能性の裡にまでその力を操作的に介入していった、自然の可能性を、そして自然の秘められた力を挑発的に引きずり出す。例えば、原子核や遺伝子の構造のうちへ力を差し込みその構造を操作的に改変することによって、そこから新たなエネルギーや新たな可能性を力づくで引き出そうとする。このような挑発は外なる「自然」にだけ向けられるのではなく、私たちの内なる「自然」、すなわちヒューマン・ネイチャーにも向けられ、私たちの能力、可能性が強引に引き出そうとされる。例えば、商業に於けるテクノロジーは、私たちの「第一の自然」には本来属していないはずの購売欲を巧みに挑発し、ひき出してくる。そして購売欲は私たちのヒューマン・ネイチャーの「第2の自然」となっており、私たちを内から駆り立て、衝き動かす。そしてまた、「教育」を自称するテクノロジーは人間の才能を性急に引き出そうと企るのである。

このように挑発し、挑発されて動き廻ることがその自然本性となってしまった私たち現代人は、後をふり返ることもなく、単に競いあって「より多く」、「より速く」と量的な多さを（その単なる裏返しとして「少なさ」を「稀少価値」として）性急に追い求めてやむことがない。このような活動は何ら創造的なものを産みはしない。その活動の跡には大量の廃棄物以外には単なる数字が、単なる記録だけが残されるだけである。そして本来それ自体は何の意味ももたない数字以外は、逆に意味のないものになってしまう。例えば今日のオリンピック競技で競われるのは「より速く」、「より高く」であり、100 mを何秒で走れたか、何 m跳べたか、そしてなによりもメダルがいくつとれたかが問題とされ、それ以外のスポーツマンシップといったものは曖昧で意味のないものとして翳んでいく。

私たちは今日このような時代の、社会の流れのうちにあればこそ、かえって増々、その奔流から脱け出して、いかにあるべきか、何を為すべきかを、自分の存在と将来を賭してそれこそ「真剣に」考える「時間（スコレー）」と、「場所（スクール）」を必要とするのではないであろうか。

## 付、人名録

ホイジンガ Johan Huizinga (1872~1945)

オランダの文化史家。主著『ホモ・ルーデンス』で、「遊戯」こそ人間の最も本質的活動である、と説いた。

アリストテレス Aristoteles (前382~前322)

古代ギリシアの哲学者。ソクラテス、プラトンと並び古典期ギリシアの哲学を代表する。彼は人間について、「理性的動物」、「政治的動物」、さらには「アニマル・リデンス」（笑う動物）など様々の定義を残した。

ピュタゴラス Pythagoras (前6世紀ごろ)

古代ギリシアの数学者・哲学者。観照を重んじ、生産実践を軽んじた。

ファリントン Benjamin Farrington

(1891~1974)

現代イギリスのマルクス主義的科学史家、古典学者。

カント Immanuel Kant (1724~1804)

啓蒙期ドイツを代表する哲学者。理性能力の自己批判を根本的立場とする批判哲学を確立した。

ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel

(1770~1831)

ドイツ古典哲学最大の代表的哲学者。独自の弁証法の確立によって哲学的最も包括的で統一的な哲学体系を樹立した。

パスカル Blaise Pascal (1623~1662)

フランスの数学者・物理学者・宗教哲学者。「人間は考える葦である」は彼の言葉として有名。

ハイデッカー Martin Heidegger

(1889~1976)

現代ドイツの哲学者。人間存在を、「それにとってその存在に於いてその存在それ自身が

問題であるところの存在者」と規定した。そして「存在への問い」をその生涯にわたって問いつづけた。

(受理 1988. 7. 22)

## 註

- (1) ホイジンガ、『ホモ・ルーデンス』(高橋英夫訳)、「まえがき — 序説」、中公文庫、11頁。
- (2) アリストテレス、『政治学』、第1巻、第2章、1253a。
- (3) アリストテレス、『形而上学』、第9巻、第6章。
- (4) アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、第1巻、第5章、および、第10巻、第7章。
- (5) 上掲書、第10巻、第4章。
- (6) B. ファリントン 『ギリシア人の科学』(上)(出隆訳)、岩波新書、202頁。
- (7) カント、『純粹理性批判』、第二版、序文、13頁。
- (8) カント、『実用的見地における人間学』、アカデミー版全集第7巻、323頁。
- (9) ヘーゲル、『イェナ実在哲学』、第1巻、ラッソ版全集第19巻、237頁。
- (10) パスカル、『パンセ』、ブランシュヴィック版、断章番号131番。
- (11) アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、第10巻、第7章。
- (12) scholē (ギリシア語) > schola (ラテン語) > school (英語)、Schule (独語)、écoles (仏語、école の古語)、というエチモロジー的経緯を経て「学校」を意味する欧語が派生した。
- (13) ハイデッガー、『技術への問い』(講演・論文集、第3版、1967年)、16頁